

過日、父・喜代造葬儀の際には、ご多用のところご来駕のうえ、ご懇篤な弔詞を賜り、まことにありがたく厚く御礼申し上げます。

K様のあたたかくお心のこもったお言葉に、父との深い交わりをあらためて感じました。橋本カントリークラブ会報のために父の書いた原稿を私が拙く赤入れたお話し……父がK様のご指摘ににんまりとした……は、六年前の一月にファックスで父とやりとりした日を鮮明に思い出させてくれました。

「楽しく仕事をやっているか？」と父がK様に訊ねた話……私自身、現在、小説を書きあぐね大きな暗礁に乗り上げていて、自分で書いても読み返しても、ちっとも面白くない。せつなくない。笑えない。肝に響かない。そういう沈滞した状況を抜け出すための大きなツボを、父に鋭く指摘された気がいたしました。

死の五日前まで仕事をしていた父……父の来世への株立ち方は、自分の好きな道を選んだ私自身への最後の、そして最大の教えではないかと思っています。

私と女房にとっての子どもは、私たちの作品です。

父に孫の顔を見せてあげることができませんでした。私と女房の満足できる作品をつくるのが父に喜んでもらえる最大のことだと思っています。

K様がお読みになっていなかった父の文章を添えさせていただきます。ご一読いただければありがたく存じます。

このたびはほんとうにありがとうございます。深く感謝いたします。

父・喜代造の不肖の息子ですが、今後ともどうぞよろしくご指導を賜りますようお願いいたします。

たましいだけの見えない姿となった父とK様と三人で、大阪の街にて一献傾ける日をお待ちいたしております。

本日は、まずは略儀ながら書中をもって御礼かたがたご挨拶申し上げます。

不

二〇〇九年七月五日

吉村 喜彦

K 様